

## 歴史と暴力

ヨルク・バベロフスキ  
石田勇治訳

米国人作家デニス・ジョンソンは、自ら目撃者となったリベリア内戦に関するルポルターージュを次のような文章で記述している。

「反乱軍は昨年（1989年）12月に作戦を開始した。亡命先から戻った彼らは、象牙海岸を通してリベリアの北部と東部にやってきた。その後すぐに、（ともに反乱軍の）プリンス・ジョンソンとチャールズ・テイラーは袂を分かった。ジョンソンによれば、それは戦略上の反目のせいだが、テイラーの言い分によると、ジョンソンが自分の部下を虐殺したので、テイラー自身が彼に死を宣告したためだ。理由が何であれ、ゲリラ戦は降り続く雨の中、南方の首都モンロビアをめがけて蛇行しながら進んだが、実際にゲリラ戦が首都に達するとは誰も予想していなかった。ところが（翌年）6月末になって突然、ゲリラ戦は首都を襲った。テイラーの兵は空港を占拠した。ジョンソンの兵は反対側から接近して町を征服し、ドウ大統領とリビア国軍の大半を建造物で囲まれた市街地に隔離した。西アフリカ諸国経済共同体（ECOWAS）軍が到着した。住民は首都から出て行った。英国大使館職員は出国し、フランス外交官たちも旅立った。米国国務省の職員六名ほどが残り、海兵隊が米国大使館を取り囲むように機関銃を設置した。首都は電気が途絶え、水道は止まり、食糧も枯渇した。内戦はそこで驚くべき残忍さを発揮する。テイラーの部隊が、略奪戦で手に入れた婚礼式服とシャワーキャップに身を包んで大統領府護衛兵を相手に戦った時、お目出度くもおぞましい空気が辺り一帯を包んだ。シャワーキャップは雨よけになるが、婚礼式服は何の役に立つのだろうか。そのうちジョンソンの兵は、鬘屋からかっぱらったベレー帽とヘアピースをつけ、改造ベンツに分乗して大通りを疾走し、辺り構わず銃をぶちかました。犠牲者の死体が異臭を放つので、それを近く of 海岸に積み重ねておかないよう、英国大使館付近の住民たちがジョンソンの兵に要請した。彼らはこれを聞き入れた。リベリアには何キロメートルもの海岸線があるのだから。

レバノン人でさえ、いつか戻れるとの思いを胸にペイルートを去った。（リベリア）難民の大部分は徒歩で道を急いだ。まずはテイラー支配下の領土を、次にリベリア最高のハイウェイを西へシエラレオネをめざした。それはさながらサッカーの試合が終わった後の人の大群のようだった。通常なら五日で行ける平坦な道だが、今回はとても厄介な問題に苦しめられた。というのも、たいていは11歳から15歳の若者で、ソ連製のAK-47カラシニコフと米国製のM-16自動小銃で武装したテイラー

の反乱軍が、クラン族、マンディンゴ族、そして大統領軍と旧政府関係者全員を探し出して殺害していたからだ。難民は、60キロメートルほど先のクレイという町にある管理センターに到着した。そこで『これは臭うか』と反乱兵がたずねた。腐敗臭のことである。『おまえたちは自分が何者か知っているだろう。そうでなければ、この異臭が放たれる場所へ連れ戻されるだけだ』。方言を正しく喋らなかつたり、過度に裕福で栄養状態がよいように見えたりした者はみな射殺され、首をはねられ、石油をかけられ火を放たれた。マノ川で溺死させられた者も少なくなかった。シエラレオネに到着した難民は、鉄条網で囲まれたこの管理センターについて、その杭には人頭が串刺し状態になっていたと証言した。ブドゥー教の魔法の噂も広がっていた。つまり、テイラー軍は不死身で、銃弾が奴らに危害を与えることはない。彼らは互いの背中をひっかくために銃で打ち合っている。テイラーの兵は戦闘の前にいつもきまって若い女の身体を割り、その血を飲み干し、心臓を貪る。テイラーの兵は蛇と象に変身することができ、腕と足を好きなだけ伸ばし、縮めて見えなくすることができる、と。この内戦で繰り広げられた強姦、略奪そして殺害が他の内戦と比べてとくにおぞましいわけではないが、残虐行為が迷信によって暗闇の力と結びついており、それらは何か底知れぬ恐ろしさを感じさせたのである。<sup>1)</sup>

ジョンソンが描いたことを体験したいと思う者はいないであろう。しかしながら暴力はどこにでも存在する。それは、愛や性的欲望の充足と同様、ありとあらゆる場所に今も昔も存在する。だが我々は一方を自明のこと、人間の基本的本性であり、説明不要のことと見なすが、暴力については、これを人間生活から消滅すべき異常と捉える。これはなぜか。あえて単純化して答えれば、暴力は、少なくともそれを甘受すべき者に痛みと不安を引き起こすからであり、また暴力欲は他者の痛みなしに満たされ得ないからである。だがこの回答は、暴力行為が平和に生きる人びとの間に引き起こす苛立ちについての半分の真理しか言い当てていないであろう。というのは、国家権力が暴力犯の出過ぎた態度をたしなめ、紛争が敗者の死をもって決定されることはないということを人びとが知っているからである。人びとは制度・機構を信頼し、自らが殺されることがないことを自明中の自明とみなす不可視の規則に信を寄せるからこそ、毎朝自宅から外に出るのである。人びとは、他の場所で正常であることを持続的な苛立ちと思わないでいいように、暴力を人間生活から消滅されるべき異常と見なすのである<sup>2)</sup>。

平和に生きる人びとは、自分の生活世界で起きることのない殺戮や暴力行為を耳にして苛立ちを覚える。人間が一見して根拠なく殺し合い、虐待し、暴行を加え、しかもそれに喜びを感じる者が少なからずいることを信じるができない。なぜなら、彼らはどんな場合でも、暴力を逸脱した振る舞いと信じており、そのために自分の現実を議論が拳に優る空間と考えるからだ。戦争は、ひとたび勃発すれば、教義・信念・論拠によって操舵できない固有の論理に従うことを、また人間は、平

時に禁じられていることが許された時、粗暴な野獣へと転じることを認識しようとしなさい。そして誰も可能と思わないことが起きると、その出来事を何らかの方法で解明し、絶望に陥らないよう、その根拠探しを始めるのが常である。つまり暴力は何か上位の目標・目的に従ったものであり、正常さからの逸脱である。理念と信念が暴力犯の手を導き、貧困・抑圧・不況・自信の不足のせいで暴力的になるように強いられたのだ—そんな風に考えるのである。事実、たいていの歴史解釈において暴力犯は狂っていたか、あるいはそのようにしか行動できないもっともな根拠があったとの理由で、規範を逸脱した人間とされている。もし逸脱した振る舞いが何に基づいているかが分かれば、文明への信頼が何に依拠しているかを掴めるだろうし、その逸脱した振る舞いを治療することもできる。人間は、よく言って聞かせ、暴力的に行動する理由のない生活環境を整えば、もっと良くなるというのである。

すべての歴史叙述は暴力を逸脱として扱ってきた。ノルベルト・エリアスは暴力を、抑えきれない衝動発展から生じる行為と捉え、赤裸な身体的暴力はヨーロッパ近代において徐々に日常生活から消滅したと主張した。気高い戦士は、絶対主義時代ヨーロッパの宮廷でおべっか使いと陰謀家に転じた。なぜなら、彼らの身体の力と手腕は権力闘争で何の役にも立たなかったからだ。文明化の過程は、陰謀が暴力に優れた時に完遂したという<sup>3</sup>。今や20世紀の極端な絶滅と総力戦を経験した後で、エリアスのこの断言に信をおく歴史家はごくわずかしかないだろう。しかしそうした希望から、神話としての文明化の過程への反証と目されるべき説明が生じた。ジクムント・バウマンが約20年前、前近代的な戦争欲ではなく、近代的な「造園家国家」の秩序熱こそ、20世紀の行き過ぎた暴力に責めを負うという持論を展開した。それによると、啓蒙時代に理性に基づく行動が人間の基準に高められて以降、人は頭で考えられることを疑念なく行えるようになった。だが、すべての資源を秩序目的の実現のために動員し、秩序づけも飼い慣らしもできないものを殲滅できるようになったのは、バウマンによれば、近代的干渉国家の統制力と兵器庫のおかげである。こうして近代は全面的な絶滅暴力の実現空間となったのである<sup>4</sup>。

この解釈は一見、文明化過程の神話に矛盾するように見えるが、実はそうではない。なぜなら、いずれの解釈でも暴力は「誤った」理念の反映か、それとも不公正な社会秩序の反映として合理化されているからだ。暴力が引き起こすものは何であれ、暴力はいつも逸脱、誤った方法、誤った道、いつの日か治癒する病と考えられている。ひとたび病気が診断されれば、それも文明化によって、寛容と社会的公正さによって、治癒され得るものとなる。突発する暴力に関する歴史家の説明にはいろいろな型があるが、どれも、暴力の結果、事態を支配したり作りだしたりできるという思い込みを動機として説明している。暴力にやがて終焉がもたらされるという信念は、ひょっとすると歴史家が今なおしがみついた最後のユートピアかもしれない。というのも暴力は、太古の昔から現在まで、どこにあってもひとつの可能性であったし、これまでどんな文明化プログラムも人が人を傷つけ、殺すことを阻んでこな

かったのである。

暴力の核心を隠蔽するのは実行者であり、犠牲者である。なぜなら、彼らは自分がした行為、受けた苦しみを、事後の平定された社会の行動論理に適合するような根拠を挙げて説明するからである。ポグロム・殺戮・戦争が終わって、再び殺人が禁止されると、話題に上るのはせいぜい、犯人も犠牲者も苛つかせないもの、暴力が一時の異常と思わせるものだけである。たとえば、拷問や殺人には気高い動機があった、どうしても必要で避けられなかったと言って、彼らは苛立ちを抑える。実行者は自分が他者に加えた危害を自分自身と周囲に対して合理的に説明しなければならぬ。そして、犯人の責任が問われれば、彼らはなぜ他の行動をとれなかったか、誰にもわかるよう自己を正当化しようと試みる。犯人が指摘するのは、上官の命令、物的強制、あるいは殺害命令に背いた場合に待ち受けていた死である。

実際フルシチョフとミコヤンは、スターリンの死後、1930年代の極端な暴力に自ら荷担したことをそのように語った。ニュルンベルク裁判で被告となったヒトラーの側近たちも、回避できない命令の下に無力にさらされていたと述懐した。元国防軍最高司令部長官カイテルは法廷で次のように述べている。「私に何ができたろうか。総統、最高司令官に一将校がたてつくことなどできない。我々は命令を受け取り、それに従うのみだ。」<sup>5</sup>

自分の犯した行為で罪に問われない者は、自分の行為には気高い動機があり、危険からの防衛、あるいは当地の後進性の克服などの目的があったと言って何百万人もの絶滅に分かりやすい意味を与える。モロトフは、スターリンの死から20年経った時点で、あの大規模テロはソ連を内敵と外の危険から守り、没落から救うために必要であったと述べたが、これ以外に何と言えただろうか。何千人もの殺戮が独裁者の気まぐれのせいだったと言えただろうか。ただ戦時強制に関わる発言だけが、40年後も意味をもつ唯一の答えであった。おぞましさは、やむを得なかったと言って正当化されたのである<sup>6</sup>。

犯人だけでなく犠牲者も、自らが蒙った暴力に対して、自らが苛立たないような意味を与えようとする。負傷し、逮捕され、痛みがあってもこれらを耐え抜き、友人や親族の暴力的な死を体験した者にとって、「すべては偶然に起きた」という考え方は耐えがたい。彼らにとって、暴力は理解可能な根拠に基づくべきである。それゆえ、暴力は人間を使って何をするのか、逆に人間は暴力を用いて何を行うのかという問いを考える時、犯人と犠牲者の説明や自己正当化の主張はあまり役に立たない<sup>7</sup>。なぜなら、根拠だけを語る者は、暴力が物を言う際に何が起きるか皆目理解しないだろうからである。

人間は現在の自分になるのではなく、もともとすべてを備えている。暴力は人間に与えられた可能性であり、それはいつでも、どこでもそうであった。暴力は行動資源であり、その資源に誰もがアクセスできるだけなく、利用することもできる。誰もが叫び声を上げられるし、威嚇し、拳を使い、突き刺す武器や火器を使うこと

ができる。暴力犯は注目の原因となる。暴力の根拠は無視できても、顔面への一撃は無視できない。ほんのわずかなことでも拳を使って権力増大を達成できる。この点に、暴力犯に一もつとも反撃にあわなければいけないことだが一絶対的な権力感情を与える暴力の魅力が存在する。人間が暴力的になるよう自動的に強制する動機も状況も存在しない。暴力の行使は、決断と結びついている。ハインリヒ・ポーピッツは、「人間は決して暴力的に行動しなければならないということはないが、いつも暴力的に行動することはできる。人は人を殺さなければならないということとは決してないが、いつも殺すことはできる」と記している<sup>8</sup>。暴力の源泉は想像力にある。どんな残酷性も我々は想像することができる。そして記憶の中に暴力がひとたび刻み込まれれば、それが記憶から抜き取られることはない。暴力は単に記憶の中で「体験されたこと」としてだけでなく、これから起きる「望まれること」としても存在する。ポーピッツによれば、こうした「可能なことの地平は、我々が知っているように、事前の計算をはるかに越える。想像上の暴力は狐火のようにあらゆる種類の白昼夢や悪夢を駆け巡る」。人びとの意識の中で想像された暴力が進入できない空間はない。だが想像された暴力に危険がないと思われるのは、我々が「抵抗、リスク、自身の力の制約を巧みにかわすことができる」からである<sup>9</sup>。

暴力が実際に生じると、すべてが以前と同じではなくなる。それは、現実がもはや純粹な観念として統制できなくなるからだ。状況を支配する大権が失われ、世界は天地が逆転する。傷害と死から身が守られる確かさが消滅する。なぜなら、暴力は、それを体験した者によって無視されることがないからだ。暴力は統制が失われるや否や、すべての人間関係を、暴力への回答であるかのごとく構造化する。ひとたび戦争とテロで傷ついた不信社会を生きた者は、ここで何が言われているか見当がつかせよう。ヴァルラム・シャラムフはスターリンの収容所での経験について、「権力が何を意味し、銃をもった一人の男が何を意味するか、私は理解した」と述べた。デニス・ジョンソンも同様の経験をした。ジョンソンの暴力経験は彼自身を別人に変えてしまった。死体を見ることに慣れてしまったし、人がどれほどたやすく殺されるか、そして人が死を遂げることがどれほど大変なことか身をもって知った。暴力が遍く存在するこの環境で武器がなければ、ジョンソンはとっくに死んでいたであろう。人間は他者を殺すか、それとも殺されるかの選択しかない時、人間の味方ではなくなる。ひとたび暴力空間に立ち入れば否や、人間はその瞬間しか生きられない命の一部となる。かつて正常だと見なされていたことが、境界線を失った暴力を目の当たりにして意味を失う。ジョンソンは米国への帰途、クリスマスカードを書く一人の女性に出会うが、彼女はこの義務を果たすことがいかに大変かと嘆いていた。正常さにまつわるすべての「基準がずれて」しまった。地獄から逃げ出してきたばかりのジョンソンは、平和に生きる人びとの日常をばかばかしい非現実と感じたのである。

戦争の中を生きて、来る日も来る日も他者に殺されるか、傷つけられるかと覚悟

していた者は、ここでいう「基準のずれ」という表現が何を意味するかすぐに理解できるだろう。暴力が日常的な正常さになった場所では、誰もその原因をたずねない。自明なことに説明は不要であるからだ。その代わりに、暴力の犠牲にならないように武装し、事前の対策を講じることが最も正常だと考えるようになる。加害者には、犠牲者になりたくない者もなれるのだ。人間が相互に暴力を行使する時に何が起きるかを理解するために、理念や意図を引き合いに出す必要はないのである。

暴力がどのように生じ、それが何を引き起こすか理解しようとするなら、暴力が展開する状況を精密に描かねばならない。なぜなら、イデオロギーでも、理念でも、論拠でもなく、状況と状況による強制力が我々の身に何が起きるかを定めるからである。人間は様々である。強い者もいれば、弱い者もいる。ある者は武装して、ある者はしていない。ある者はなすべきことをなす根拠をもち、ある者は計画などなくてよかった。暴力を引き起こす始まりが何であれ、始まりの根拠だけがわかっても、暴力の力学と可能性を理解することはできない。なぜなら、暴力の状態は決まっていないし、それゆえ暴力事件がどんな力学を発展させるか、あらかじめ見通すことはできないからである。

たしかに人を殺し、テロを行い、虐待をする者が失業中であつたり、アナーキストであつたり、あるいは消化不良に悩んでいたりするが、こうしたことを知っても、暴力が統制を失った時に何が起きるかについての我々の理解が深まるわけではない。つまり失業が犯人の手を導くのではないのだ。もしそうなら暴力研究など不要である。「鬱状態の者や武器マニア、ホラー映画ファン、結婚で傷ついた者、失業者は何百万人もいるというのに、なぜ暴力犯は何百万人もいないのか」とヴォルフガング・ゾフスキは問うている。その答えは、誰もが与えられた機会を利用するわけではなく、暴力が魅力的な行動オプションであるか否かも状況と其中で動く人間によるからである。費用対効果を精確に勘案して拳にものを言わせる者もいるが、自分の行動がもたらす帰結を恐れて暴力行使を思いとどまる者もいる。暴力的な対決に臨んでも勝利できないと予感して、あるいははしかるべき時期を逃したために暴力行使を思いとどまる者もいる。だが時には、暴力への欲望がすべての思慮をお払い箱にすることで状況が制御を失うこともある。何をやるにせよ、人間は常に状況の中で行動する。そしてその状況は人間に何をすべきか指示しないものの、生起したことを好き勝手にコントロールする可能性を制限する。暴力は感染性を有し、誰もその吸引力から逃れられないがゆえに、平和からは生じない強制行動を生じさせる。人を殺し、傷つける力学は、人が何を考え、何を思うかではなく、人がどこで、どのように行動するか規定されるのである。

我々は、あるひとつの暴力事件を理解するために、多くのことを知らなければならない。たとえば暴力が起きる前に何が起こっていたか。犯人は武装していたか。犯人に共犯者がいたか。犯人の相手は武器をもっていたか—これは一方が武器をもっているか否かが他方の行動の可能性に決定的に影響するからだ。犯人は相手の反



撃を、あるいは処罰を覚悟しなければならなかったか。それとも自分の行為は許されるから、あるいは相手に反撃する能力がないから、犯人は安全だと高を括っていたのか。犯人は兵士として軍の命令に従うほかなかったから、殺害を強いられたのか。それとも自分の決断で行動したのか。他の選択肢があれば、犯人と犠牲者は逃げる事ができたか、それとも暴力に物をいわせるよりほかなかったのか。相手に襲いかかった際、犯人は恐怖を覚えたか、酔っていたか、それとも麻酔にかけられていたか。戦争を遂行する、殴る、傷つける、拷問するという当初の動機は何であれ、犯人と犠牲者にとって、それは実際の暴力を前に意味のないことである。暴力関係は、社会的要因研究の視点から記述することができない。暴力の後、すべてがそれ以前と変わってしまう。というのは、人間が相互に出会える条件が変わり、そうなったことをすべての関係者が知っているからだ。犯人にとって、それは、他者の意志と身体を破壊した際に感じる全能の感情であるが、犠牲者にとってそれは絶対的無力の感情である。暴力は信頼を壊し、生存者は暴力によって特徴づけられる。暴力経験は永遠にその記憶にしっかりと結びつき、彼らの行動を支配する。これを犯人も知っており、勝ち誇っても復讐や仕返しを覚悟しなければならない。暴力は、それを誰も終わらせることができなければ、極限まで自己を強めることができる。いずれにしても暴力は不信をつくりだし、それなしではいかなる社会も想像できない社会的コミュニケーションを破壊する。

これが意味することを、レームツマは著書『暴力と信頼』で描いている<sup>10</sup>。レームツマが投げかけるのは、たとえば政府が、国家権力を二週間にわたり無効とすると宣言したら、いったい何が起きるだろうかという問いである。そうなったら誰が殺されない、略奪にあわないと信頼して通りに出るであろうか。紛争になった場合、何が起きるだろうか。自分で自分を守るだろうか。万一の時に誰が助けてくれるだろうか。今や権力をもつのは自分で自分を守ることでできる者だけである。そんな状況では、知性が少々乏しいなどの欠点は筋力、決断力、無慈悲さで補われる。市民的な安全システムで長所となるすべての性質が、生き残りを賭けた闘争では短所となる。世界が逆さまになるのだ。秩序が崩壊し、無慈悲な者の時間が始まる。他者が考えようとしないことを行う権利が自らにはあると考える断固たる者の時間が始まるのだ。彼らのごく少数であっても、状況次第で多数の者の生活を地獄に変えることができる。ひとたび暴力が統制を失えば、呼吸のための空気のように戦いを必要とする精神病患者者と犯罪者の時間が始まる。暴力支配に恐れおののく者の不安ほど、彼らの権力感情を高めるものはない。

ゾフスキは「社会化の契機と根拠は人間相互の不安である」と記している<sup>11</sup>。なぜだろうか、考えてみよう。私たちは互いに不安はないが、もし法律遵守が止められ、自由が法に優越し、暴力犯が自分たちの規則を我々に押しつけるのを許すなら、不安は我々の生活に舞い戻ってくる。フロイトはアインシュタイン宛の書簡で次のように書いた。「共同体が非難をやめれば、悪意に満ちた欲望の統制も終わる。そして

人間は残虐行為、悪巧み、裏切り、粗暴な行為を犯す。それらの可能性は文化的な水準と一致しないだろう。<sup>12)</sup>もしも秩序が崩壊したり、あるいは国家権力がその暴力独占を無制限な暴力行使のために悪用すると決めたりしたことで水門が開き、安全弁が解除されてしまえば、公共空間は暴力空間へと転じてしまう。このように見れば、暴力研究は意図よりも、状況から生じる行動のダイナミズムを問うべきであることが理解されよう。つまり人が何をしようとし、何を考えたかではなく、何をすることが可能であり、何をすることが許されたかが問われねばならない。換言すれば、状況とその下の人間がポイントなのである。

暴力は人間が動く社会的空間を変化させる。というのも、暴力は平和な生活を構造化する治安を無効にするからだ。たしかにすべての暴力空間が無制限な暴力の場となるわけではない。たとえば、ジュネーブ条約の規程に則って行われる国家間戦争は、内戦・殺戮・ボグロムとは区別される。それはまた武装した者が襲撃時に行う殴り合い、犯罪者や法破りの暴力犯に対する警察の投入、テロ、恐怖の雰囲気醸成するために誰かれかまわず標的にされた秘密警察の行動とは区別される。暴力空間が何であれ、それは、平和時なら通用する社会的コミュニケーション規則の停止を可能にする空間であり、そのための権利を授ける空間である。そうした空間では、人間の態度はとくに暴力の存在に対する答えとなる。そして監獄や収容所から出られないとか、内戦で身を隠す後背地がないとか、兵士として敵を殺すか、殺されるかしかないとの理由で、暴力からもはや逃げ出すことができない時、社会的コミュニケーションは暴力関係の克服以外の何物でもなくなるのだ。

ポーピッツは暴力を権力行為と定義した。それは実行者にとって行う意味があるか否かにかかわらず、他者の身体を意図的に傷つける行為—赤裸な行為権力—か、あるいは威嚇的に実行され、他者の持続的な服従を導く行為—拘束的行為権力—である<sup>13)</sup>。すでに30年も前にヨハン・ガルトゥングは、不公平な生活環境や社会的不正も暴力であると主張し、構造的暴力という用語を使った。そして、それはすべての社会システムに潜むもので、不公平と不正をつくりだしていると述べた。しかし実行者と犠牲者のいない暴力など存在し得るのだろうか。いずれにせよ、社会的不正は暴力ではない。なぜなら、誰も痛みを感じないからであり、実行者の意図が一切の苦悩と犠牲者をつくり出さないのなら、暴力は生じない。暴力は人を殺し傷つけるが、威嚇としての効果も求める。威嚇が痛みを生むのは、犠牲者が暴力に不安を抱き、自分に期待されていることを行うからである。その際、暴力が使用されるとは限らない。死が到来してはじめて権力は終わる。なぜなら権力は死者を蘇らせることができないからだ。それとは逆に、他者の死を体験することで生者は暴力犯の手に落ち、血塗られた独裁が権力を維持するのを助ける。それゆえ権力はそれにつき従うべき者の恐怖から活力を得る。この意味でのみ、心理的・構造的暴力の概念を用いることができる。権力と暴力は相対峙するものではない。なぜなら、暴力に基礎づけられない権力関係は想像できないからだ。私たちがそのことを忘れ



てしまったのは、誰もが自らの権利を用い、生計をたてる平和的な市民社会において、死の脅しが無害化され、何を行うべきか我々が知っているからである。持続的な権力の編成についてポーピッツは「今すぐの従順さは、後回しの従順さとなった」と述べた<sup>14</sup>。事例と事例の一致から全体を規格化する態度が生じ、支配を実行するためのコストを減少させた。なぜなら正しい態度は状況からわかるからである。

エリアス・カネッティは、「暴力にもっと時間が与えられれば権力となる」と記している。その時、もし被支配者が命令に服従しなかったり、良い行いには報償を、反抗的な行いには処罰を与えると行って支配者が被支配者に歩み寄ったり、またそうすることで被支配者の生きる希望が広がり、支配者の不信が膨らんだりすると一体何が起きるかが、はっきりと示される。「必ずやおとずれる撤回不能な切迫した決定の瞬間に暴力は再び純然たる暴力となる。<sup>15</sup>」恐怖が身体と魂を捉えた時、権力は無制限となる。専制的な権力は不安をつくりだすために恐怖を必要とする。だが専制的な権力は、生者に希望の根拠を与えるためにも恐怖を必要とする。もし生き延びる見通しがなければ、武器は鈍く、権力は効果を失う。というのも死者には命以外に失うものはないからだ。なぜなら、暴力が去った後、恐怖の再来への不安が始まる。迫害と虐待から安全でない犠牲者にできることは、被った暴力を想い、その再来に備える以外にない。これまで暴力犯、暴君、精神病質者（と呼ばれる者）は、権力を根拠づければ、暴力関係はそれを境に持続的なものになることを知っていた。暴力空間を開く者は、そこでの動き方を心得ているに違いない。ウォーロード、専制君主、暴君、拷問者、秘密警察、収容所司令官—彼らは、もし自分の言葉に行動が続かなければ、何を達成できるだろうか。彼らの権力は、破壊的暴力を広めるといふ実証済みの能力に基礎づけられていた。彼らが弱さを見せれば、その権力とももおしまいだ。

暴力空間について、まだ何を補足すべきだろうか。非対象戦争では、弱者といえども暴力空間に存在する潜在的暴力の可能性を利用して強者を打ちのめすことがあるということ。絶滅収容所では、人間は全面的な権力の標的となるためにただの身体となること。専制政治が呼吸に必要な空気のように暴力空間を必要とするのは、その畏怖と恐怖を撒き散らす能力がこれまでの制度・機構・手続きの解体に依拠しているからだといい、などであろうか。もし暴力空間を分析対象とするなら、暴力には原因があるが、それは暴力に先行して存在するのではなく、暴力によって作りだされるという一点を確認しておきたい。暴力には場所と状況があり、それを行使する人間が存在する。だが人間だけが、どのように、いつ、そしてどれだけ長く、暴力に物を言わせるかを決めるのである。

暴力空間という考え方は当然ながら、籠が外れた暴力という条件の下で人間はいつも同じことを行うのか、それとも異なる態度をとるのかという問いを投げかける。そもそも暴力の文化は存在するのだろうか。むしろ暴力に免疫のある文化など存在しない。それは暴力の文化がそれ自体として存在しないと同様である。しかし何

年にもわたり暴力とともに生きる人間は、自らの社会関係を変え、不信感を抱くようになる。彼らが立てる計画は長期的というより、その日だけのものとなり、必要などきに殺人を行うことを厭わない。隠し立てのない自由主義的な支配モデルよりも、権威主義的な権力構想を優先させるが、それは彼らは何よりも自身の身の安全を求めるからである。暴力が行使されると何が起きるかが分かると、人は暴力に順応できるし、そのテクニックも習得できる。この意味で、暴力空間は、暴力自体が人の命を決することを止めたあとも、人間生活を構造化する暴力の諸文化を創出するのである。

暴力が人間を使って何を行い、人間が暴力を用いて何を行うかを理解すれば、20世紀に立ち現れた極端な絶滅行為は、これまでとは異なる目で見えてくるであろう。それはもはや単に理念・意図・プログラムの表れとしてだけではなく、互いに殺し合い、テロ行為を行うことから人間を守ってきたすべての安全装置が解除されたことの結果として理解するであろう。これまで歴史家は、暴力という彼ら自身にとっての謎を解くために、理念・意図・計画だけを論じてきたが、私はもっぱら状況とその可能性を検討する。

---

<sup>1</sup> Denis Johnson, In der Hölle. Blicke in den Abgrund der Welt, Hamburg 2008, S. 29-32.

<sup>2</sup> Jan-Philipp Reemtsma, Vertrauen und Gewalt. Versuch über eine besondere Konstellation der Moderne, Hamburg 2008.

<sup>3</sup> Norbert Elias, Über den Zivilisationsprozeß, 2 Bde, Basel 1939.

<sup>4</sup> Zygmunt Bauman, Moderne und Ambivalenz. Das Ende der Eindeutigkeit, Hamburg 1992.

<sup>5</sup> Gustave M. Gilbert, Nürnberger Tagebuch. Gespräche der Angeklagten mit dem Gerichtspsychologen, Frankfurt am Main 2004, S. 32.

<sup>6</sup> Feliks Chuev, Sto sorok besed Molotovym, Moskva 1991, S. 390.

<sup>7</sup> Jörg Baberowski, Gewalt verstehen, in: Zeithistorische Forschungen 5 (2008), S. 5-17.

<sup>8</sup> Heinrich Popitz, Phänomene der Macht, Tübingen 1992, S. 50.

<sup>9</sup> Ebenda S. 51.

<sup>10</sup> Reemtsma, a. a. O.

<sup>11</sup> Wolfgang Sofsky, Traktat über die Gewalt, Frankfurt am Main 1996, S. 10-11.

<sup>12</sup> Sigmund Freud, Zeitgemäßes über Krieg und Tod, in: ders., Gesammelte Werke, Frankfurt am Main 1987, Bd. 10, S. 324-355.

<sup>13</sup> Popitz, Phänomene der Macht, S. 48.

<sup>14</sup> Ebenda S. 239.

<sup>15</sup> Elias Canetti, Masse und Macht, München 1994 (erstmalig 1960 erschienen), S. 333.